

「絶対権力者」を操る権力

金融アナリスト

— 中南海の権力闘争は欧米財閥の代理戦争 — 永山卓矢

【専制権力体制の永続化に突き進む習近平】

中国では5年に1度となる幹部人事が決まる共産党大会の開催を控え、習近平国家主席が自身の専制権力体制の永続化の実現に向けて権力基盤を強化している。足元では引退した長老と現役の幹部が集まる「北戴河会議」が開催されていると思われ、やがてその会議の状況が明らかになるにつれて権力基盤が一段と強化されている実態が明確になるだろう。

習近平主席は今回の会議で、毛沢東以来となる「共産党主席」の地位を復活させて自らその地位に就く事で、死去するまで最高権力者の地位を維持しようとしている。また政治局常務委員会の人事についても、栗戦書中央弁公庁主任を常務委員に昇格させるだけでなく、68歳定年制の慣行を排して王岐山中央規律検査委員会書記を留任させ、張敏爾重慶市党委員会書記を2段階特進させようとしている。それにより、常務委員の7人体制が続くとすれば、自身も加えて過半数を握る事が出来る。

既に孫政才前重慶市党委員会書記を電撃的に失脚させた事で江沢民元国家主席の勢力に対しては完全に打撃を与えており、残るは胡錦濤前国家主席や李克強首相を輩出している共産主義青年団(共青団)系をいかに抑えるかが焦点だ。李源潮国家副主席には汚職の問題を持ち出す事で打撃を与えているが、李首相が留任するのに加え、汪洋副首相や胡春華広東省党委員会書記も常務委員に昇格すると共青団系が3人も占めてしまうからだ。

【中南海の権力闘争の背後に蠢く欧米巨大資本】

こうした中南海を舞台にした権力闘争は、中国を巡り各々の権力者と結び付いた欧米の巨大財閥間の勢力争いと密接な関係がある。こうした財閥が積極的に中国に進出するようになったのは、天安門事件後の91年1～2月の鄧小平による「南巡講和」を機に、中国経済の高度成長が復活してからの事だ。江沢民主席(当時)が政敵を排除して権力基盤を固めていくとともに、欧米の金融資本は「上海閥」と関係を結んでいった。特に米国の投資銀行でありながら、欧州ロスチャイルド財閥とも密接な関係にあるゴールドマン・サックスは江主席の一族と深い関係を構築していき、子息や孫が同社に籍を置いていたほどだ。

更に00年代に入ってから、ゴールドマンはポールソン元最高経営責任者(CEO、元米財務長官)が精華大学の学閥に取り入る事で、同大学出身の胡錦濤主席(当時)と良好な関係を構築する事に成功してきた。12年11月の共産党大会と翌13年3月の全国人民代表大会(全人代)で現在の習近平政権が成立した当初は、ゴールドマンを中心とする欧米の金融資本は李克強首相を押し立てて自由化、市場経済化路線を推進させようとした。それは李首相の出身母体の共青団系が民主的な政治体制や市場経済化路線に最も理解を示していたからだけではなく、ゴールドマンが首相の先輩の胡前主席を取り込んでいた事と密接な関係がある。当時、米欧では李首相の改革路線は「リコノミクス」と呼ばれたが、これを命名したのがゴールドマンの「子会社」のような存在である英パークレイズ・キャピタルだったのはこのためだ。

ところが、その後間もなく、習近平主席が権力を強めて李克強首相を圧倒するようになった。本来なら国務院総理(首相)を頂点とする国務院の管轄であるはずの経済政策の主導権も、習主席の傘下の中央財經領導小組が握るようになった。その習主席を取り込んでいるのが米ロックフェラー財閥の投資銀行(ハゲタカ)のブラックストーン・グループのシュワルツマンCEOだ。習主席が王岐山書記とともに反腐敗運動を繰り広げて政敵を排除して権力基盤を強化していくとともに、米系財閥直系にして金融、石油業界では世界最大規模を誇るシェリ・グループやエクソンモービルが中国での事業展開で主導権を握るようになった事も重要である。

一方で、欧州系財閥は中南海でのゴールドマンの影響力が弱体化したのを受けて、習近平主席が唱えている「一帯一路」構想に相乗りし、中国の豊富な外貨準備による信用を利用してインフラ建設を推進し、ユーラシア大陸に巨大な経済圏の構築に向かった。そうする事で、将来的には世界覇権が米国から中国に移る事が見込まれている中で、長期的な観点で米系財閥より優位な地位に立つ事を目論んでいる。そこで人民元を国際通貨に育てるために国際通貨基金(IMF)の特別引き出し権(SDR)の構成通貨に加え、また欧州諸国を中国主導のアジアインフラ投資銀行(AIIB)に資本参加させていった。

ところが、中国はFRBが金融政策の正常化に向かい始めるとたびたび信用不安に見舞われたように、次第に天文学的な債務を抱えている実態が明らかになってきた。そこで欧州系財閥は一旦中国との提携を諦めて米系財閥と提携し、トランプ政権の成立に動いた。FRBの政策姿勢を利用して米国への資金還流を促進させる事で人民元相場を崩落させながら、トランプ大統領の保護主義的な姿勢を利用して中国に対して通商問題で圧力をかけ、国際会計基準の導入や資本取引の自由化を受け入れさせようとしている。それにより国有銀行や代表的な国有企業を次々に買収していく事で中国そのものを“乗っ取って”いき、その上でユーラシア経済圏の構築に向かうという事だ。

【同床異夢の関係にある巨大欧米財閥】

以前当欄でも指摘したように、北朝鮮問題を煽っているのも、その本質は水面下での通商・市場開放問題を巡る交渉で米国が中国に圧力を加えるためのものだ。

北朝鮮で主導権を握っている朝鮮人民軍を操っているのは親イスラエルの米国の新保守主義(ネオコン)派であり、北朝鮮による度重なるミサイル発射や米国による軍事的な圧力は“ヤラセ”に他ならない。中国としては絶対に北朝鮮の体制を崩壊させられない事情がある中で、欧州系財閥に後押しされているトランプ政権は石油供給の抜本的な停止を強く迫る事で、水面下での交渉で譲歩をさせようとしている。

これに対し、米系財閥は軍需産業系主導で中国を相手に「新冷戦」構造を構築する事で、巨大な軍需を創出する事で世界経済成長を牽引していこうとしている。習近平主席を取り込んで強権的な統治体制を強化させようとしているのも、中国を「悪の帝国」に仕立てて巨大な対立軸を構築するのに好都合であるからだ。

かつて、ソ連では米系財閥は欧州財閥系のレーニンやトロツキーを排してスターリンを後押しし、“恐怖政治”を推進させる事で「旧冷戦」体制を構築していったのと同じようなものだ。米系財閥と欧州系財閥はともにトランプ大統領の擁立に動いたが、その本質は“同床異夢”の関係にある。

4月6～7日の米中首脳会談以降、トランプ大統領は習近平主席を“おだて殺し”にしてきたが、中国側が譲歩しないので最近では再び圧力を強めている。6月29日には北朝鮮による不正な取引に関わったとして丹東銀行を米金融システムから遮断する制裁措置を発動したが、これを他の銀行にも拡大させると脅している。米金融システムから遮断されるとドル資金が調達できなくなり、政府が外貨準備を取り崩して供給しないと破綻せざるを得ないからだ。

ただ、米系財閥としては最高権力者である習主席を取り込んでいる以上、あまりに中国に圧力をかける事を望んでいない。ここに来て、中国側が態度を硬化させて米国からの要求を全て跳ね付けているのは米系財閥の意向によるものだろう。

中南海を巡る権力闘争は、欧米巨大財閥の“代理戦争”の性格を帯びている。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

テクニカル

放れにつく用意

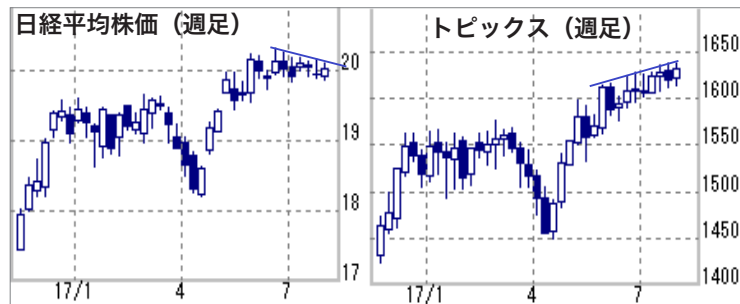
先週はTOPIXが高値を更新、日経平均株価は横ばいで推移。依然として異市場間弱気ダイバージェンスが続いている。

日経平均が6月20日に付けた年初来高値20,318を上抜けない限り、この弱気シグナルは継続される。このケースでは下放れの可能性が高いが、高値を更新すれば逆に上放れとなる。確率は2分の1だが、先週次の通り述べた「ただ相場波動上、この保合い中ではエネルギーをかなり貯めている。従って一旦保合いを放れると、数週間はトレンドが発生すると誰もが考えるところであろう」。

TOPIXは上昇ウェッジ。日経平均は6月以降2万±300円でレクタングルを形成。弱気ダイバージェンスが解消されない限り、テクニカル上は下放れを警戒しておく必要がある。先週述べた如く「下放れは19,000円処。この下には重要なギャップが存在する。即ち18,648～18,840。ザラバで埋めて引け値で回復すれば、次のV字反転への足掛かりとなろう」。

下放れのケースではTOPIX先物は1,550前後がサポートになる。目先は弱気に支配されつつあるが、もし急落が発生

すれば絶好の買い場になると見ている。ただ、上述のギャップを埋めて引けると、先週述べた如く、外部要因によるショック安を警戒する必要がある。特にNYダウ平均が2000ドル以上の急落に見舞われるような暴落においても同様。そういった大きなショックがない限りは最大でも3～4月のような下げ程度で終わるとみている。上抜けのケースでは21,000円の攻防になるが、ここまでエネルギーを貯めているのであれば、1996年の高値をテストする可能性も高まる。過去2週間「(保合い)13本目前後で上放れると見る」と述べたが、今週は13本目。現在は上下どちらにも放れる可能性が出ている。放れにつく用意をしたい。



今週の必読押し

チキンレース終了

先週2日、米金融当局者が追加利上げに慎重な見解を示した事を受けて、外国為替市場はドル売り一色に。この日のドル指数は92.55まで売られ、16年5月第一週の水準まで売られた。ただこの週の安値91.22(同年5月3日)は割り込まなかった。

先週末4日、7月米雇用統計発表。前哨戦のADP雇用統計が市場予想前月比19万人増に対して17.8万人であったが、NFP(米非農業部門雇用者数)は前月比18万人増の市場予想に対して20.9万人増。6月のNFPも22.2万人増から23.1万人増に上方修正。平均時給も市場予想を超える前年同月比2.5%増という結果に一転、市場はドル買いとなる。この新規買いに、それまでの売りの買い戻しが加わってドル指数は93.64まで上昇。ここ1週間の下げ幅をほぼ取り戻した。逆にユーロ/ドル相場は2日の1.1903から雇用統計発表後に1.1731まで下落。こちらは今週利食い売りの週になるだろう。

テクニカル的見地で、NFPは引き金に過ぎない。以前から当欄で繰り返していたがドル指数の下げも、ユーロ/ドルの上げも既に日柄は満ちていた。今週は1月3日の安値から31週目。それ以前は28週、29週、38週で安値サイクルが出現しており、ここに来て相場はやっと修正場面に入ったと考える。修正安出現まで、少なくとも2週、長くて5週程度の日柄は必要だろう。

チャートを見ると、日足、週足共に1.1500に第一関門となる下値サポートが存在する。更にこれを割り込むと、1.1250に次の目標値が設定される。更に割り込むと、次の目標値は1.1000になるのだが、仮にそこまで下げても、1月安値は割り込んでおらず、プルバックとしては想定範囲。相場は先月の段階で2015年んだけどからの長保合いを上抜けており、目先の修正が完了すると、年内にも1.3500、更に進めば1.4000までの上昇があるのではないかと見ている。これは2014年前半の値位置だ。

恐らく、ドル指数の買い戻し、ユーロ/ドルの利食い売りが一巡すると相場は再度ドル売り/ユーロ買いの流れに戻る。短期派は売り、中長期派は買い準備期間といったところか。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！

株で資産を蓄える
足立真一

株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー
代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円(税込み)



今週の相場風林語録

万人が呆れ果てた値が出れば、高き、安きの境なりけり

「記録破れば高峠」という言葉がある。値段にしても、商い高にしても、誰もがびっくりする時は、ほぼ限界に来ている。

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

二黒土星入り

ドル円相場だけを見ていると、どうにも不思議な相場が続いています。なぜならば、政治リスクはよもやの安倍政権への不信で増加しつつあり、北朝鮮の挑戦的な態度は全く変わっていない。何しろ防衛相の交代時期の空白を狙ったICBM発射は本当に危険そのもの。一気に円安が加速してもおかしくなかったのです。日銀決定会合はいつもの緩和維持に対して、ユーロや米国の金融政策は明らかに引締めへ転換、円独歩安が起こってもおかしくないはずなのです。ところが、笛吹けども踊らずを絵にかいたような相場となっています。

やはり、機関投資家にとってはまだまだ海外投資を活性化させるにはあまりにも金利差が小さすぎる、ということなのでしょう。またリスクに見合わない、と考えているわけです。

さて九星高下伝では二黒土星入りします。先月の三碧木星が「一気に加速して急落する」、つまり虚勢と星回りそのものとな

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (406)

中原 駿

不思議な現象であった。

長期債の含み損失は膨大であった。しかし、短期金利が長期を超えて利益が全くでないわけではなかった。

利益は極端に減ってきたが、短期金利の上昇によってヘッジということになっている短期債の売りは利益を上げていた。

長期債の含み損失は時価会計しかなかったもので、会計上消えていた。一方、短期債の利益はどんどん増えたのだが、資金調達による日々の利益が減少してしまっていたので、短期債は一定の規模以上で減ってしまった。その結果、長期債とのバランスをとるために、利食いした売りポジションを翌日には作り直すという結果となった。

第六感の 底値を探るタイミング



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

ドル円とNY金の波動

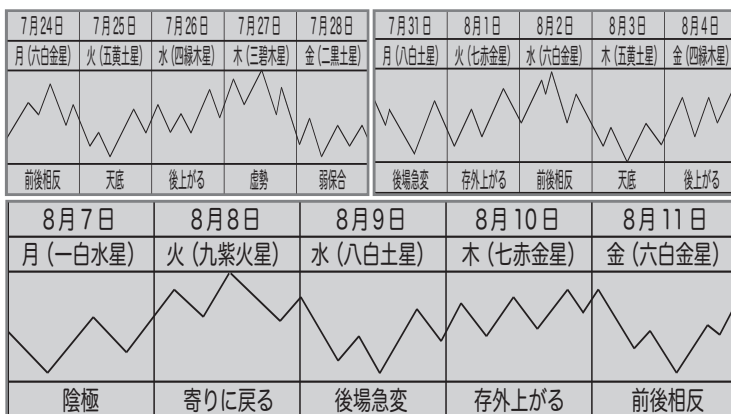
ドル円相場の7～11週サブサイクルは今週が8週目となる。相場は109円台を付けたが、ここからはボトムを探す時間帯に入る。今回は雇用統計前後の動きは重要であろう。ダメ押しの下げが、今週到来すればボトムになりえる。一方で112.50を超えて引ければ、サブサイクルが既にボトムを付けた可能性が高まる。前者の場合、その下げが4月安値108.11前後を試すものであれば、1年サイクルボトムにもなりえる。

現段階での下値目標値は先週述べた如く「7月11日高値から二段下げの様相。この下値目標値は108.31±0.46。6月安値更新は4月安値に迫るがこのケースでは1年サイクルの位相にトラブルが生じる」。1年サイクルのボトムを付ける時間帯は4～8月である。ダブルボトムの様相を示す事になる。

現在のドル円と同じような波動パターンを示した市場がある。それはNY金であるが、ドル円の6月、7月のダブルトップが時間はズレるがNY金でも4月、6月に出現した。2市場の2つの高値を重ね合わせると現在のドル円相場の下げが金の6月の動きを再現している。今後期待されるのは、金が7月にM型の安値を付けて反発したような動きがドル円でも再現されるか注目したい。

サイクルベースから考えれば十分にあり得る動きだ。現在の金相場は既に前下げ波動の7割以上を戻しているが、ドル円も一旦ボトムを付ければ、波動形態としてはこの程度の戻りを入

りましたので、今月の弱象を意味する二黒土星には一層の注意が必要でしょう。ユーロ高/円高が本格化する、すなわちドル独歩安が完全に進展して思わず「勝負あった」の一年になるのではないのでしょうか。



まさに、短期のところだけ自転車操業のように売りを繰り返していたのである。

毎日金利がとどまるか、上昇している状況では、このような自転車操業は無益のように見えても、利益が利益を生んでいた。しかし、同時に長期債との金利差が縮まるにつれて、資金収益の減少はどうにもならないところまで来ていた。

それでも、上野の銀行はどの支店でも本部でも莫大な資金収益が減少していたので、ヘッジが効いていると考えられていたシンガポール支店は収益はまだ減少していないほうであった。

しかし、現実には巨大な長期債ポジションと為替の含み損で上野の時間はどんどんと限られてきていた。上野が最後の勝負をするタイミングを、マーケットが迫りつつあった。

上野にはこれ以上の含み損と自転車操業のような短期ポジションのターンオーバー（ポジションを崩し造り替えていくこと）に耐えられなくなってきた。

れてもおかしくない。ただ、そのボトムが4月安値前後で付けるのか、あるいは6月安値を更新せず、下値切り上げの状態を維持するのかがわからない。

言える事はドル円相場は現在サブサイクルボトムの時間帯に入っており、同時に1年サイクルボトムのオープン内にも入っているということだ。つまり、この下げ場面が絶好の買い場になる可能性がある。

その意味では雇用統計発表後の週がポイントになる。ダメ押しを入れるか、あるいは既にボトムを付けて上昇過程に入っているのか。今週の動きで判断したい。ちなみにNY金相場はダブルトップからほぼ1カ月でボトムを付けた。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第51回】ドル指数のサイクルについて(6)

前回、当欄で米ドルの「絶対評価」であるドル指数のサイクルを解説したのが米大統領選直前の2016年10月。この当時はトランプが大統領になると分析していた人は少なかったのですが、政策や主義主張の是非を問わず、メリマン氏はサイクルの観点からトランプ勝利と見ていました。民主、共和両党とも、それぞれ16年ごとに自党の大統領が出現するサイクルがあり、2016年の選挙は共和党大統領が出現する年であったのです。

もう一つ注目すべき点は、この相場の基調が共和党政権時には弱気、民主党政権時には強気になるというもの。『フォーキャスト

ト2017』では、共和党政権樹立でドル安になると予測。実際、トランプ勝利で相場は1月3日から現在に至るまで下降トレンドが続いています。このサイクルが正しければ2024年の大統領選挙で民主党が勝利する事になります。

同時にこれは、ドル指数自体の16年(16.5年)長期相場サイクルのボトム形成場面とも符合するのです。ここ30年の動きを見ると、この相場は1992年9月にボトムが出現。そこから15年6カ月後の2008年3月に次のボトムをつけています。2017年8月はここから9年5カ月目であり、ボトムから16年後は2024年の大統領選イヤーと重なります。従って、断言するのは時期尚早かも知れませんが、1月3日の高値は、現行16年サイクルの天井であった可能性が高いと思われます。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

水星逆行1週間前に入る。

先週次の通り述べた“8月3日、天王星が逆行に転じる。以前から逆行の開始日と終了(順行)日、中間点の3つは、相場の転換ポイントになりやすいと指摘していた。加えて今回の逆行開始日は、ユーロや金の大きな相場変動の特異日であるヘリオ射手座ファクター(7月28日～8月7日)の中間点付近。金もユーロもファクター開始日に向けて上昇したので、中間点と天王星逆行開始日とが重なる時間帯は転換ポイントとして注目しておきたい。更に4日(日本時間では5日)は木星・冥王星スクエア(90度)。2016年11月25日の初回、3月31日の第2回に続いて、3回目となる今回で一連のスクエアシリーズは終了する。2回目は金星逆行(3月5日～4月15日)の影響が入っているので、判断が難しいのだが、ユーロ/ドル相場は米大統領選直後からの急落相場が11月24日にいったん止まり、10営業日程度上げてから今年1月安値に向けて下げた。また2回目の時もその4営業日前の3月27日に目先の高値をつ

けて反落している。従って今週から来週にかけて、ユーロ/ドルが高値を形成する可能性が星回りから見て取れる”。先週、N Y金が高値をつけたのが8月1日、ユーロ/ドルが高値をつけたのが同月2日。米国時間4日に共に大陰線をつけた。星回りのには、ヘリオ射手座ファクターの中間点で両相場は反転下落に転じ、木星・冥王星スクエアでその下げが加速した、という解釈が出来る。

ヘリオ射手座ファクターは今週7日に終了。これは金とユーロ/ドルの(今回は)上昇の特異日が終了するという事を意味する。恐らく相場は今週末に向けて大きく下がるのではないかな。奇しくも同時時間帯は満月にして月食である。そうでなければ、上下に大きく乱高下するだろう。何故なら今週から水星逆行1週間前の時間帯に入るからだ米国時間12日(日本時間13日)から始まる水星逆行1週間前の相場は往々にして荒れやすい。どちらの場合でも14日に相場は急反転する可能性がある。

仮にこの見通しを超えて相場が進展するなら次の候補は15日の金星・冥王星オポジション(180度)か17日の金星・木星スクエア(90度)の時間帯に注目しておきたい。

今週の主な予定・経済統計

8月7日(月)

- ・ OPEC 加盟国・非加盟国専門会合

8月8日(火)…満月(月食)

- ・ 米3年債入札(240億ドル)

8月9日(水)

- ・ 米10年債入札(230億ドル)

- ・ 6月の米企業在庫 (前月比0.6%の増加予想、前回は0.6%増加)

8月10日(木)

- ・ 7月の米卸売物価指数 (前月比0.1%の上昇予想、前回は0.1%増)

- ・ 同コア指数 (前月比0.2%の上昇予想、前回は0.1%増)

- ・ 米30年債入札(150億ドル:総額で620億ドル)

- ・ 米週間新規失業保険申請件数 (前週は24.0万件)

8月11日(金)

- ・ 4月の米消費者物価指数 (前月比0.2%の上昇予想、前回は横ばい)

- ・ 同コア指数 (前月比0.2%の上昇予想、前回は0.1%増)

- ・ 7月の米財政収支 (902.33億ドルの赤字)

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

8月7日(月) 月食オーブ内、米国市場注目

8月8日(火) 月食 テーマは分断と争い、そして振動

8月9日(水) 9～11日変化日

8月10日(木) 高値圏、安値圏からの反転は加速し易い

8月11日(金) 勝ちに不思議な勝ちアリ、負けに不思議な負けナシ

8月12日(土) リーマンショック、トランプショック 言い訳ならず

8月13日(日) 相場の張り方にもアナログ派とデジタル派がある

FORECASTS 2017

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

ザ・グレートリセットとは?

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日瑠香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問合わせ: 投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話: 03-3669-0278 FAX: 03-3668-4444